静岡県立大学
短期大学部
研究紀要第９号
1995年度

聖書のフェミニン・リーディング研究（Ⅰ）

鈴木元子

序論

文学批評の一つとして、フェミニズム批評[1]が台頭した。フェミニズム批評とは、一言で言えば、例えば、J・カラーの『ディコンストラクションⅠ』第一章二節[2]の小題のように、「女として読むこと」である。過去を辿ればれば、読むという体験は専ら男の特権であった。書くのも男であり、読者が男であることを前提に執筆された。女は男性読者の仮面を被って、こっそりと読んだものだった。ところが、一九世紀中葉の女権拡張運動に端を発する女性解放運動の広がりと共に、文学の世界においても、女性作家・女性読者の存在が公認されるようになる。即ち、社会運動としてのフェミニズム思想が、読解としてのフェミニズム詩学へと発展を遂げたのである。沈滞していた批評学界に旋風を巻き起こし、読者の性差という視点から、斬新で多様な作品解釈が生じ始めた。「女として読むこと」が提言されるようになって初めて、女が女として読み、そんな読み方は可笑しいと言われないですむようになった。しかし女が読めば、それで「女として読むこと」になるわけではない。何故ならこれまで長きにわたって、男として読むことを学習させられてきた者にとって、これを払拭するのは並大抵なことではないからである。

では具体的に、「女として読むこと」とはどうすることなのか？

前述したように、最初から男の読者を前提に書かれたものである限り、「女性読者が女としての利害関心に反して、男の登場人物の立場に身を置くように仕組まれている」[3]のは当然なことである。しかし、もはや男としての読みを避けること。定説となっている読みでも、読み直して、男性特有の偏向があればそれを指摘すること。男にとって周縁事項や隠蔽したい事柄[4]でも、女にとっては重要な主題である場合もあるからである。

男尊女卑の社会と言われ続けてきた日本でも、「七〇年代後半以降フェミニズムの主張はある程度社会的承認を受け」[5]てきたように

思われる。むしろ欧米の方が、なかなか打ち破ることのできない壁を有しているようだ。それは西洋キリスト教社会には絶対的基準であるカノンが存在するからで、時代に適したカノン解釈[6]がなされなければ、それだけ現代社会の動向に追い付けないばかりか、お荷物となる可能性もある。それは、例えばアメリカ大統領選で必ず争点となる妊娠中絶の是非をめぐる問題や、ローマ・カトリック教会等における聖職者からの女性除外の問題等に見受けられる。本年、日本基督教団（プロテスタント）の女性教職神学研究会から『豊かな恵みへ―女性教職の歴史』が発行された。それによると、「日本では女性教職が比較的早く認められ、女性への按手が諸外国よりも早く行われたので、先駆的な意味をもっている」[7]と言う。一九三三年一二月五日に高橋久野が按手を受け、女性牧師[8]の第一号が誕生したのに対して、日本に多くの宣教師を送っていたアメリカは、合衆国合同長老教会でマーガレット・タウナーが按手を受けたのが一九五六年のことである。WCC（世界教会協議会）で女性按手の問題が取り上げられるようになったのが、一九六一年のニューデリー大会であったことを考え合わせると、日本の女性按手が如何に早期であったかが了解される。現在もローマ・カトリック教会を始め、実現していない教派やグループも少なくない。それは偏に、伝統的な、男性中心の聖書解釈に固執しているからではないだろうか。そこで、拙論では、聖書を女として読むことによって、正しい使信を汲み取るべく、読みの可能性を探ることにしたい。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールが、「キリスト教の理念は女性圧迫にやはり少なからず寄与したのである」（『第二の性』）[9]と記している。確かに、聖書には女性差別[10]と神の前での平等という相反する思想の混淆がみられる。その理由をフィオレンツァは、「聖書は、男性によって書かれ、父権制文化を表現しているものであるから、男性の作品である」（Rather, it is man-made because it is written by men and is the expression of a patriarchal culture.）[11]ことの所以と見る。編著者はみな男性で、意識から女性を消去しようとする傾向にあったのかもしれない。とはいえ、女性が完全に抹殺されているわけではない。女性に焦点を当てて重箱の隅をほじくり、粉々に散らされた一片一片をピンセットで拾い上げるような読みの作業をすると、女たちが次々と息を吹き返してきて、各々の人生で起きた神との出会いを披露してくれる。旧約時代にも女たちは活躍していたし、イエス・キリストの周りに女たちは群がっていた。初期キリスト教宣教時代にあっても、活動の中心に女たちがいたことを発見する。読み方によるのである。[12]拙論では、この十数年に公表された（おもに女性）神学者、研究者、聖職者たちの研究成果を踏まえ、またそれに啓発された筆者自身の読みを紡がれている言葉の端々に織り込んで論述していくことにする。

Ⅰ　男性中心的な翻訳の障壁

パウロの手紙の中に、「わたしの同胞で、一緒に捕らわれの身となったことのある、アンドロニコとユニアスによろしく。この二人は使徒たちの中で目立っており、わたしより前にキリストを信じる者になりました」（ロマ一六・七）の一節がある。このユニアス（男性名）は元々はユニア（女性名）で、当時活躍していた女使徒であると女性神学者たちは指摘している。[13]

KJV[14]："Salute Andronicus and Juni-a, my kinsmen, and my fellow prisoners, who are of note among the apostles, who also were in Christ before me."

RSV[15]："Greet Andronicus and Junias, my kinsmen and my fellow prisoners; they are men of note among the apostles, and they were in Christ before me."

このように一六一一年のキング・ジェイムズ版では「ユニア」であったものが、リヴァイズド・スタンダード版では「ユニアス」となり、そこにはさらに「メン」（男たち）の言葉まで挿入されて、自ずと読者に二人とも男性だと信じ込ませる基盤を作ってしまっている。[16]

日本では、一八八七年出版の文語訳聖書も一九五四年の口語訳聖書でも、「ユニアス…彼らは」と訳されているが、これは英語の聖書から日本語に翻訳した故である。一九六三年に出版された新改訳聖書はギリシャ語原典にできるだけ忠実に訳す意図から、「＊ユニアス…この人々は」と訳しておいて、横に「＊別訳『ユニア』（女性）」と記載している。最近の書物では、L・ウィリアム・カントリマンが、「女性は当初からキリスト教共同体のなかにあって正式の現役構成員であり、…使徒として（例えば、ユニアス）働いた」[17]と書いて、ユニアスの名はそのまま使って、女使徒としての彼女の存在を認めている。

創世記で、女性が創造されたのは神がアダムにふさわしい「助け手（原語でエイゼル עֵזֶר (ʿēzer)）」（創二・一八、口語訳）を造ることになったためだと記されている。この聖書語句によって、新約の「互いに仕え合いなさい」（エフェ五・二一）の言葉にも拘らず、何世紀もの長きにわたって、妻は夫の「助け手」と規定され続けてきた。殊に、日本語では「助け手」と訳されていたために、妻は夫の助手、補助者（家政婦、秘書）等の従属の意味で捉えられ、それが神の教えと権威づけられてきた。ところが最近の研究によって、これが誤訳からくる曲解であったことが判明した。原語のヘブル語には、何等従属の意味は含まれず、むしろ神を形容する高貴な言葉であることが分かったのである。原語の「エイゼル」は、「主は助け、主は盾」（詩一一五・九―一一）と言うときの「神の助け」の意味である。「わたしの父の神はわたしの助け」（出一八・四）、「あなたの助けは

わたしを大いなる者とされました」（口語訳）「あなたは、自ら降り、わたしを強い者としてくださる」（新共同訳）（詩一八・三六、サム下二二・三六）、「聖所から助けを遣わし」（詩二〇・三）、「主は我らの助け、我らの盾」（詩三三・二〇）、「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。私の助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る、天地を造られた主のもとから」（詩一二一・一―二）、「ヤコブの神を助けと頼み」（詩一四六・五）、「その国は助けにならず、益を与えず」（イザ三〇・五）等。そこで、創世記二章一八節は、神は人間に、天から降る神の助けである配偶者を造られたという意味に解せる。

創世記一章二六節から二八節に関しては、新改訳の「神はまた、彼ら（男と女＝筆者註）を祝福し、このように神は彼ら（男と女＝筆者註）に仰せられた」が、一番原典に忠実な訳である。欧米キリスト教社会では、これまでこの箇所を男は神の像に似せて造られ、万物を支配するように命じられたと読むことで、男性たちは積極的に自然を征服してきた。[18] 自分たちの使命として。しかし、その環境破壊と先住民の文化や人権を踏みにじる行為は、今日の反省材料になっている。「彼ら」（男と女の両者）を隠さずに訳出することで、生殖、出産、育児、教育の問題も勿論、地球の環境保全や平和の推進によって地球の良き管理者になるという共同の主権を、神が女と男の双方に授けていることが明確化するのである。[19]

次に指摘されるのが、フェベに付けられた“διάκονος”についてである。問題の箇所は、ローマの信徒への手紙一六章一節から三節で、原文のギリシャ語の語順に従って英語に直訳すると次のようになる。

“Now I commend to you Phœbe the sister of us, being also a minister (διάκονον) of the church-in Cenchrea, ……”[20]

ところが、この「ディアコノス」がKJVでは、フェベには、“a servant”と英訳され、同語が男性に使われるときには、“deacons”（フィリ一・一）に、パウロやアポロには、“ministers”（一コリ三・五）と訳出されている。そこで、この翻訳には男性翻訳者の解釈と価値判断が入り込んでいる良い例だと、フィオレンツァは見るのである。[21]

翻訳の作業には翻訳者の意図と解釈が付物である。だからこそ何種類もの聖書が出版されているわけで、最近は英語の性差を始めとする差別表現を他の表現に言い換えた聖書が発行されてきている。

Ⅱ　イエスの福音

(1)　父権制構造からの解放[22]

イエスは、貧しい人たちを縦形社会の抑圧構造から解放しようとした。[23] ガリラヤで伝道を始めてまもなく、安息日に会堂に入ると、聖書（イザヤ書）の「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に

福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ四・一八―一九）を朗読し、イエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言う（ルカ四・二一）。実際にイエスは、次のような場面で、人々に父権制社会からの解放を告げた。

ファリサイ派の人々が近寄って来て、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」（マコ一〇・二）と尋ねたときも、イエスはこう言う。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟[24]をモーセは書いたのだ。しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」（マコ一〇・五―八）当時の離婚は男のわがまま、即ち、男性の父権制的精神構造とその社会現実の故に、男の側から一方的になされたものだった。そこでイエスは、弱い立場にあった女たちを守ろうとしたのである。神は家父長制を創造されたのではなく、女と男が「家」を離れ、「サルクス」（一体＝平等なパートナーシップ）に入るように、人を造られたのだと言う。「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。」（マコ一二・二五）逆縁結婚は、家と財産という父権制構造の維持のために必要とされたが、それに対してイエスは、神の世界にはもはや家父長制的結婚はないと教える。「…わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。」（マコ一〇・二九―三〇）この後半の「家、兄弟、姉妹、母、子供、畑」は前の部分の繰返しであるように見えるが、よく見ると、前にはあった「父」が後ろの文では消失している。イエスの「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」（マコ三・三五）の言葉の中にも、「父」はいない。神の御心を行う血縁や地縁を越えたイエスの真の家族（神の家族、平等な弟子集団、共同体）の輪に、支配的な父権的父は含まれないのである。

ある女が声高らかに、「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」（ルカ一一・二七）とイエスに言ったとき、イエスは、「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」（ルカ一一・二八）と言った。つまり生物学的な母親である以上に、神の弟子であることの方に重きを置いている発言である。ここで初めて、旧約時代の「女は子を産んで、母となることによって救われる」式の思想は、二次的なものとして格下げされたのである。

日本では若くない女性を「奥さん」と呼び、滅多に名前で呼ぼうとはしない[25]。聖書の神は、「それぞれに呼び名をお与えになる」（詩一四七・四）神で、女たちを無名性から呼び出され、ルツ、ナオミ、ラハブと名前で呼ぶ。日本ではよく夫のことを主人と呼ぶ女

性がいるが、神はもう女に夫（イーシー）と呼ばせ、主人（バアル）とは呼ばせないと言う。「あなたはわたしを、『わが夫』と呼び、もはや、『わが主人（バアル）[26]』とは呼ばない。[27]」（ホセ二・一八）

旧約の預言者だけではなく、イエス・キリストも、「あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ。また、地上の者を『父』と呼んではならない」（マタ二三・八―九）と教えている。そして、ゲツセマネの祈りでも「アッバ、父よ」（マコ一四・三六）と呼び掛けることによって、ユダヤ教の絶対的権力者として君臨していた父権を相対化する。イエスは権力者や支配者に対峙して、父権制構造の下位に属する女（寡婦）、奴隷、子供（マコ一〇・一四―一六）、軽蔑された職業につく者、外国人、異教徒、障害者などの虐げられた人々を解放することを、その使命としたのであった。

(2) 男・女の序列の真相

聖書の中で女の劣性を仄めかし、現在に至るまで女性に多々の不利益をもたらしてきた箇所は、おもに次の二ヶ所である。

「婦人が教えたり[28]、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて、罪を犯してしまいました。[29]」[30]（一テモ二・一二―一四）

「…すべての男の頭（かしら）はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。…というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。…いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。」（一コリ一一・三―一一）

両者の主張で共通しているのは、アダムが先に造られ、その次にエバが造られたという人類始祖たちの誕生の順序を論拠にしている点である。まず、次のように幾つかの論点を挙げ、それについて考察してみることにする。

① 先に生まれたものは、果たして優位に立つのか。

神の七日間の創造順序において、人間より先に造られた魚や鳥や動物の方が人間より優位に立つのだろうか。否。神は愛する者のために周りの環境を整え、最も大切なものを一番最後に創造されたと考える方が自然である。イエスの「逆転の論理[31]」のように、後の者が先であるかもしれないのだ。女性の創造は、下降するのではなく、「クライマックスに向かうのである。彼女は後からの思いつきではなくて、極致である[32]」。

人の創造神話におけるもう一つの解釈は、土から造られたアダム

と固有名詞のアダムは同一ではないという見解である。まず人ができる瞬間はこうだ。「主なる神は、土（アダマ）の塵[33]で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創二・七）この人はまるで出来立てのほやほやの人形のようである。「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた」（八節）や、「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」（一五節）の言葉から、人が神の保護管理下のもとに、受け身的ではあるが、徐々に手足を始動させていく様子が読み取れる。次に、神は自分の造ったロボットのような生き物の頭の働きをみるために、「野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた」（一九節）。このように七節から二一節にかけての記述に、人の進化、もしくは進歩・発達のようなニュアンス、つまり時間の経過といったものを感じるのである。

「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨[34]の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。」（二一―二二節）ここで人の性の分化が行われる[35]。社会心理学者のエーリッヒ・フロムは、『愛するということ』の中でこう書いている。「最初は両性が一体であったとするこれと同じような考えは、また、アダムからイブが作られたという神話にも含まれている。しかし、この物語においては家父長主義の精神のために、女は男に対して低位にあるものと考えられている。[36]」元来結合していた一体が二つに切断されたという考えはプラトンの『饗宴』[37]にもみられるが、筆者はもとの人を両性具有[38]とは言いたくない。あくまでも性の未分化の状態と解したい。最初の人が「A」だとすると、あばら骨を取られ、その跡をふさがれた者は論理的には「Aマイナス」となり、最初の人と全く同じではない。あばら骨から女ができたと言うのなら、その同瞬間に、あばら骨を取られて肉をふさがれて造られたものが男であって、このとき女と男は同時に出来上がったことになる。そこで時間的後先の問題は解消される。実際には、人類の原型はより女性型に近いらしい。京都大学名誉教授の大島清氏（生殖生理学）は、「生物学的見地からみると、イブの肋骨からアダムが生まれたということができる[39]」と述べている。

もう一つの解釈は、「対」という関係から女と男の平等性を捉えようとするものである。聖書における女と男の関係は、これまで男の為政者たちに強調されてきたような、秩序の序列化や優劣・主従関係といったもので計るべきものでは毛頭なく、むしろ対関係として提示されていると読むべきである。ノアの箱舟の物語で、「すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、…それらは、雄と雌でなければならない」（創六・一九）にそのモチーフが隠されている。その原型は、「女（イシャー）と呼ぼう、まさに、男（イシュ）から取られたものだから」（創二・二三）の音声的

類似性（英語でも、「マン」に対して「ウーマン」、「メイル」に対する「フィーメイル」）に示されている通りである。これは、男の染色体がXYで、女の染色体がXXというのに似ていて面白い。イエスは、イスラエルの町や村へ弟子たちを派遣するとき、「二人ずつ先に遣わされた」（ルカ一〇・一）。テュービンゲン大学組織神学教授のユルゲン・モルトマン[40]は、この二人ずつとは男と女のことだと理解する。この他ジェンダーを対句として用いているのはパウロで、「母親がその子供を大事に育てるように」（二テサ二・七）、「父親がその子供に対するように」（同一一節）と言って、牧会は両性の親による養育のようなものでなければならないと教えている。

出生の順序に関しては、家父長制社会では、家督が譲られる長男が確かに重んぜられたであろう。しかし聖書の世界では、実は違うのである。モーセは長男ではなかった。兄のアロンはモーセの補佐役として働いた。カイン（兄）とアベル（弟）の話では、神は弟の捧げ物を喜ばれ、嫉妬した兄は弟を殺害している。ヤコブ（兄）とエサウ（弟）の話でも、長子の権利は弟に与えられる。ヤコブの息子は十二人いたが、神の選んだ息子は第十一子のヨセフであった。ダビデの王位を継いだソロモンも王位継承では兄と争って勝っている。どうも長男よりも弟の方に、神の愛が注がれているようである。

② イエス・キリストは、序列をつけるという発想自体を忌み嫌っていたのではないか。

弟子たちが自分たちの中で誰が一番偉いか、の論議をしていたとき、イエスは子供を抱き寄せて、「自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ」（マタ一八・四）と語る。ルカ伝では、「あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である」（ルカ九・四八）と答えている。

イエスは古い秩序をひっくり返し、新たな秩序について語った。「異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」（マコ一〇・四二―四四、マタ二〇・二五―二七）キリストの思想によれば、もし男が女より偉いとするならば、男は女に仕える者とならねばならない。「いちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり」（ルカ二二・二六）、「給仕する者」は「食事の席に着く人」より偉い（ルカ二二・二七）と語ったイエスは、自らそれを実践する者でもあった。自分の上着を脱ぐと手拭いを腰にまとい、弟子たちの足を洗ったのである。

伝道を始めると、山上の説教をして、自分が律法を「完成するため」（マタ五・一七）に来たことを告げる。その説教にはひとつのパターンがある。「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。」（二一節）「あなたがたも聞いているとおり、

『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。[41]」（二七―二八節）このパターンは計六回続く。「彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」（マタ七・二八）キリストは、旧約の律法を再解釈して、これこそ律法の完成であると語っている。即ち、イエス・キリストの教えの方が旧約より優先されるべきで、旧約の記事を根拠にした先の二つの引用はあまり説得性があるとは言えない。

③　男女の序列の問題には、聖・不浄の感覚が隠れているのではないか。

女を劣性とすることの論拠の一つに、清浄倫理（レビ一一章から一五章）が存するという。レビ記で出血は汚れとみなされている。「贖いの儀式を行うと、彼女は出血の汚れから清められる」（一二・七）にあるように、当時の人々は月経と出産の関係を知らずに、ただ「出血の汚れ」に恐れと不安をもったのだろう。「清めの期間が完了するまでは、聖なる物に触れたり、聖所にもうでたりしてはならない。」（一二・四）この規定が、無意識のうちにキリスト教の慣習やキリスト教徒の感覚の中に忍び込んで[42]、女性を聖職から除外していると言うカントリメンによれば、「これは知的な反応ではなく、典型的な本能的反応なのである」[43]。そしてこの感覚こそが、現在も引きずっている差別意識の根とも言えるものなのである。

罪人と食事を共にするイエス、長血を患って慢性的に不浄となっていた女が自分に触れることを許すイエス（マコ五・二五―三四）、癩病患者に浄めのために触わり、死体の不浄の危険を冒すイエス（マコ五・四一、ルカ七・一四）。この師の教えは、イエスの復活後、伝道を始めた弟子たちにも示されている。天から不浄の獣が入れ物に入って下りてくる夢を見たペトロに、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」（使一一・九）と天から声がする。この夢をお告げと捉えて、清浄を守ろうとするユダヤ人キリスト者の中に割礼をしていない異邦人を加える決意をするのである。パウロも、「それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています」（ロマ一四・一四）と宣言する。神は女を造られ、善しとされた。イエスは一二年間長血に苦しんでいた女を癒し、「安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい」（マコ五・三四）と祝福して、全ての女性たちが（十二は「全ての」を象徴、血は月経を象徴）、神の平安の中で安心して生きられる、新しい生を与えて下さったのである。それでも、女を不浄呼ばわりする者は、一体何者なのだろうか。

引用の「婦人が教えたり、…」（一テモ二・一二）は、何かというと女性を抑圧するのに用いられてきた聖書語句であるが、旧約の女預言者、士師のデボラの記事では、バラク（男の将軍）が、「あなたが共に来てくださるなら、行きます。もし来てくださらないなら、わたしは行きません」（士四・八）とデボラに頼み込む。何故なら、

神はデボラに働いているからである。デボラはバラクに、「今回の出陣で、あなたは栄誉を自分のものとすることはできません。主は女の手にシセラを売り渡されるからです」（九節）と預言するが、それは成就する。

このように旧約の時代でも、神が問題としているのは性差ではなく、その人の信仰である。前述の食物の清浄・不浄の問題でも、パウロは「疑いながら食べる者は、信仰によらないから、罪に定められる。すべて信仰によらないことは、罪である」（ロマ一四・二三、口語訳）と語って、すべての問題の礎をその人の信仰に置こうとしている。信仰とは、神を信頼することである。

デボラもヤエルも主婦であるが、神は彼女たちの夫を神の器とするのではなく、妻の方を用いた。新約の「夫に従いなさい」の言葉や「男は女の冠であり」の言葉により、全ての男性が即、全ての女性よりも優性であると信じている人々がいるが、これは大きな間違いである。申命記に、「主はあなたを頭（かしら）とし、決して尾とはされない。あなたは常に上に立ち、決して下になることはないであろう」（二八・一三）の語句があるが、この「あなた」とは、性別を越えて、「主の戒めに聞き従う」（同）「あなた」である。「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」のイエスの言葉通りに。先の引用でも結局、パウロの結論とするところは、最後の「いずれにせよ、…」の部分である。また、女が罪に陥り易い存在だと書いている「テモテへの手紙」にしても、第二ではその冒頭で、女たちの信仰の伝承行為を高く評価しているのである。

厳格なユダヤ教の信仰訓練を受けていたパウロは、順序についてとてもうるさかったが、このパウロが弟子夫妻のプリスキラ（妻）とアキラ（夫）に対して、妻の名を夫より先に書いているのは注目に値することである。計六回出てくる中、「夫・妻」の順はたったの二回（使一八・二、一コリ一六・一九）だけで、逆に、「妻・夫」の順は四回（使一八・一八、一八・二六、ロマ一六・三、二テモ四・一九）にも及んでいることから、プリスキラの働きの方が優れていたことが了解される。これは宣教の同労者の場合、男も女もないと言ったパウロの言（ガラ三・二八）の実証とも取れる。私たちは、「人間（男＝筆者註）に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（使五・二九）。

注

（1）織田元子『フェミニズム批評――理論化をめざして』（勁草書房、一九八八年）。サンドラ・ギルバート、スーザン・グーバー（山田晴子、薗田美和子訳）『屋根裏の狂女――ブロンテと共に』（朝日出版社、一九八六年、一九九二年）。岡本靖正編『現代の批評理論第三巻　批評とイデオロギー』（研究社出版、一九八八年）。下河辺美知子編『よびかわすフェミニズム――フェミニズム文学批評とアメリカ』（英潮社、一九九〇年）。エレイン・ショーウォーター編（青山誠子訳）

『新フェミニズム批評』（岩波書店、一九九〇年）。エレン・モアズ（青山誠子訳）『女性と文学』（研究社出版、一九七八年）。

（2）J・カラー（富山太佳夫・折島正司訳）『ディコンストラクションⅠ』（岩波書店、一九八五年、一九八六年）五九―九五頁。

（3）カラー、前掲書、七三頁。

（4）日本軍慰安婦問題や買春、家庭内暴力等の性暴力。（絹川久子『女性の視点で聖書を読む』日本基督教団出版局、一九九五年、六三―九七頁）。

（5）今村仁司編『現代思想を読む事典』（講談社、一九八八年）五一六頁。

（6）「聖書は、過去と現在とを統合するために歴史の中をさまよい歩く巡礼者である。」（フィリス・トリブル、河野信子訳、『神と人間性の修辞学――フェミニズムと聖書解釈』ヨルダン社、一九八九年、一五頁）。

（7）山本菊子編著『豊かな恵みへ――女性教職の歴史』（日本基督教団出版局、一九九五年）一七三頁。

（8）男性牧師の場合、妻との両輪で職務を果たしているので、「かくして女性牧師は存在するというだけですでに、牧師職の伝来の組織構造全体を混乱させており、このディレンマを解決するには根本のところ二つしか道がない。つまり職務をおりるか、新しい職務実践のやり方を展開させるか、である。」（レテーナ・ヴィント「新しい教職の概念のための弁明」L・ショットロフ編著、大島衣訳『聖書に見る女性差別と解放』、新教出版社、一九八六年、四四頁）。

（9）ボーヴォワール（生島遼一訳）『第二の性Ⅳ――女の歴史と運命』（新潮社、一九五九年、一九八三年）一六一頁。

（10）一向に変化しない人々の性差別意識の原因を聖書に求め、聖書を批判の対象にした書に、ケビン・ハリス（奥田暁子訳）『性と宗教』（コンパニオン出版、一九八五年）がある。

（11）Elisabeth Schüssler Fiorenza, *In Memory of Her--A Feminist Theological Reconstruction of Christian Origins* (New York: The Crossroad Publishing Company, 1985) 13.

（12）オックスフォード大学聖書釈義教授のクリストファー・ローランドも、「父の力」と題する論文の中で、「女性による聖書の読み方は、もっぱら白人男性からなる解釈者たちには失われていた多くの視角を切り開いてみせた」とその価値を認めている。（R・ホロウェイ編、小野功生・中田元子訳『教会の性差別と男性の責任――フェミニズムを必要としているのは誰か』新教出版社、一九九五年、一〇七頁）。

（13）E・モルトマン＝ヴェンデル（大島かおり訳）『乳と蜜の流れる国』（新教出版社、一九八八年）一二五頁。E・S・フィ

オレンツァ（山口里子訳）『彼女を記念して――フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』（日本基督教団出版局、一九九〇年）九三頁。

（14）KJV=King James Version, 1611.

（15）RSV=Revised Standard Version, 1881-5, 1901, 1952.

（16）「女に使徒などいるはずがないという従来の男性聖書学者達の『常識』が本文の校訂にまで影響を及ぼしていたということです。」（荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店、一九八八年、二一六―二一七頁参照）。

（17）L・ウィリアム・カントリマン（太平洋神学院新約学助教授、男性）「女性と男性についてのよき訪れ」ホロウェイ編、前掲書、四八頁。

（18）「自然に対する暴力は、産業化社会の台本の中に極めて明白に書き込まれていて、いつでも人間存在に対する暴力へと転じ得るのである。」（ドロテー・ゼレ、関正勝訳『働くこと愛すること――創造の神学』、日本基督教団出版局、一九八八年、一六七頁）。

（19）新共同訳聖書ではこう訳されている。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」この中の「人」が英語では「マン」になるために、まず男をイメージしがちであった。この訳でも不十分で、「すべてを彼らに（男と女に）支配させよう」や、「神は彼らを祝福して彼らに（男と女に）言われた」と正確に訳すことで、「産めよ、増えよ」の件、即ち生殖に関する重荷、子供の出産と育児、教育の事柄などが、女だけに任されている仕事ではなく、男性も女性と共に担わなければならないものであるというメッセージとなって鳴り響いてくる。

（20）The Reverend Alfred Marshall D. Litt. *The R.S.V. Interlinear Greek - English New Testament* (London: Samuel Bagster and Sons Ltd., 1958) 652.

（21）日本の最近の新共同訳聖書では、「奉仕者」に訳している。

（22）フィオレンツァ『彼女を記念して』二一九―二三九頁参照。

（23）貧者とは、貧窮者、病人と障害者、軽蔑的な職業の者、異教徒等。「徴税人や娼婦たちの方が、…先に神の国に」（マタ二一・三一）。「徴税人や罪人の仲間だ」（ルカ七・三四）。

（24）「人が妻をめとり、その夫となってから、妻に何か恥ずべきことを見いだし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。」（申二四・一）。

（25）遠藤織枝編著『女性の呼び方大研究』（三省堂、一九九二年、

一九九三年)。

(26) 聖書でいう「バアル」とは、パレスチナおよびシリヤ地方で礼拝されていた男性神で、イスラエルの預言者たちは徹底的にこのバアル礼拝を攻撃し粉砕しようとした。

(27) 「夫は妻の頭」(エフェ五・二三)から夫が妻に神のような特権を所有していると考えているとしたら、「これは偶像崇拝です!」(H・G・クロトウェル編、飯野かおり・奥田暁子訳『愛の勝利の輪』新教出版社、一九八八年、一一五頁)日本人の妻たちは夫を「主人」と呼ぶのはやめるべきである。

(28) 実際にプリスキラはアポロに教えているし(使一八・二六)、年上の女は若い女を教えていた(テト二・四)。

(29) エバが禁断の実を食することについて、「父の権威とのこの対決、あるいはへその緒を切ることを、罪として理解するのを止めるべきである。…この神話的物語は、成長することが何を意味するかを語っている。…服従しないこと、知恵の木の実を食べること、そしてその後、生の苛酷さを生きぬくことである」(ゼレ、前掲書、一一九—一二〇頁)。シンボルとしてのリンゴには不死の意味もある。聖なる森の女神は英雄たちにリンゴを与えたという。「イブは『知恵』によってアダムを永遠に生きる者にしようとしてリンゴを与えたのである。」(アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店、一九八四年、二二頁)聖書の雅歌でも、リンゴは恋人であり、力づけてくれるものであり(「りんごで力づけてください」)、生命力を与えてくれるものを表わしている(雅二・三、五、八・五)。

(30) 女性を家父長的家族の秩序の中に留めようとしているのは、逆に「男と女の別もない」立場を貫こうとした女たちが教会内外に存在したことの間接的証言ではないか(荒井、前掲書、二八〇頁)。

(31) 「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」(マタ一九・三〇、二〇・一六、マコ一〇・三一、ルカ一三・三〇)。

(32) P・トリブル「イヴとアダム」キャロル・クライスト、ジュディス・プラスカウ編著(奥田暁子、岩田澄江共訳)『女性解放とキリスト教』(新教出版社、一九八二年)一〇三頁。

(33) 塵から造られたとは、「わたしの身体は、わたしが痛み、飢え、性的欲求を持っていることをわたしに告げる」。(ゼレ、前掲書、五四頁)。

(34) 「あばら骨」というのは聖書のここにしか出てこないけれども、「骨」と考えると、聖書の中には特異な使い方がなされているので、それに少し言及してみたい。まず、骨とは聖書の中では生命のシンボルであるということだ。人が苦悩すると、「骨はふるび衰え」(詩三二・三)、今度は心が喜び楽しむと、「骨は青草のように育つ」(イザ六六・一四)。エゼキ

エル書三七章の枯れた骨の復活の記事は有名だが、ここでも干からびた白骨は、バビロン捕囚のイスラエル人の絶望的状態の比喩となっている。戦争で殺された軍隊の兵士たちの骨という現実的な意味に加えて、肉体的・精神的状態をも形容するものである。「我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる。」（エゼ三七・一一）土葬にしても、火葬にしても、残るのは骨であることから、骨は人間の不滅の部分とも言える。エゼキエルが預言すると、干からびた白骨は、「カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた」（エゼ三七・七）のである。そして、骨に筋と肉と皮膚が生じ、さらに神の霊が吹き込まれると、それは人間として生き返って自分の足で立ったのである。冗談ぽく言うと、塵と神の霊で創造された男と、骨と神の霊とで創造された女とでは、やはり生物学的に認められているように、女の方が強いのは当たり前である。例えば、女性は長寿で、ストレスや病気に強い、免疫力が強い、性格的に芯が強く孤独に強い、脂肪を多く貯蔵することで数日食べなくても生きていかれる。周りの環境に適応しやすく、脳は柔軟で、体は持久力に富む。「主は常にあなたを導き、焼けつく地であなたの渇きをいやし、骨に力を与えてくださる。」（イザ五八・一一）イエスが十字架につけられたとき、当時の慣習に反して骨は折られなかった。「『その骨は一つも砕かれない』という聖書の言葉が実現するためであった。」（ヨハ一九・三六）（詩三四・二一参照）。

(35) 大島清氏は、生物学的観点から、精液と精子との関係が、地球上に生命が誕生した頃の地球環境と類似していると指摘する。「地球上の最初の生命はドロドロとした液体のなかに生まれた。その生命記憶が遺伝子にちゃんと組みこまれ、精子と精液の関係となって現われているのだろう。」（大島清『ヒトはみな生まれる前は女だった』、二見書房、一九九二年、二〇六頁）。また、聖書のエデンの園は、ゼレが人の臍の緒の切れない状態と言っているように、子宮と霊想することも可能である。初め、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」（創一・二）と書いてあるが、子宮なる世界の羊水の上に聖霊が働いていたとも想像することができる。横田幸子氏は彼女の説教の中で（『イエスと呼応しあった女たち』新教出版社、一九九五年）、生命の誕生に関わる「聖霊の介入」についてしばしば言及している。産みの行為には、マリアのような聖霊による身ごもりがあり、また、聖霊の介入により活路が拓けて赤ん坊が腹の中という闇の中から出てくると言う。実際、旧約聖書の世界では女性の子宮は神に属するもので、神の管理下にあった。神の意志で女の胎が開いたり、閉じたりするように、誕生の全行程は神に帰せられている。「母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。」（詩二二・一一）創世記の「人が独りでいるのは

良くない」（創二・一八）の言葉を、もし生物学的に説明するとすれば、人類のはるかに遠い祖先は地球の海の中で無性でいただろう。しかし無性生殖の生き物は自然の激変には非常に弱く、子孫を継続させることは困難である。「産めよ、増えよ」の意志を持つ神は、そこで、オスとメスに分離して種々の遺伝子を交じり合わせることが最重要だと考えたのである。その進化・成長の過程は、一人一人の人間が生まれてくるときに、自分の母の子宮の中で追体験をしている。海と羊水との関連については、ヨブ記の「海は二つの扉を押し開いてほとばしり、母の胎から溢れ出た」（ヨブ三八・八）の言葉がぴったりと当てはまる。これはまた、モーセの率いるイスラエル人たちが紅海を渡ったとき、海が二つに分かたれ、道が出来たことをも想起させる。生まれたばかりの赤ん坊が、第一に母の乳首を探しては口にくわえるように、出エジプトした民たちも、海の道の先には乳の溢れる約束の世界を希求していた。このように、神の天地創造のわざや神の救いの働きは、神が産む者であることを物語っている。「誰の腹から霜は出てくるのか。天から降る霜は誰が産むのか。」（ヨブ三八・二九）ここで神は被造物の母なのである。エレミヤが「なぜ、わたしは母の胎から出て労苦と嘆きに遭い、生涯を恥の中に終わらねばならないのか」（エレ二〇・一八）と生きることを疎み、ヨブが「あたかも存在しなかったかのように、母の胎から墓へと運ばれていればよかったのに」（ヨブ一〇・一九）と死を望むとき、「生きよ」と生を促すのは神の母親的側面である。「乳と蜜の約束の地」の、乳も土地も母親を象徴するものである。生きることは善いこと、この地上にあることは善いことなのだという感じをもたせるのは母性愛である（エーリッヒ・フロム、懸田克躬訳『愛するということ』、紀伊國屋書店、一九五九年、一九七三年、六七頁）。

(36) フロム、前掲書、四四頁。

(37) プラトン（久保勉訳）『饗宴』（岩波書店、一九五二年、一九九一年）七八頁。

(38) ギリシア・ローマ化された地域に成立したユダヤ教では、「神が人を創造したという場合の『人』というのは単数形で、その後にこれが男と女につくられたともとれるわけですから、元来は両性具有者として神は人間をつくったのだと考えられていました」（荒井、前掲書、二二二頁）。

(39) 大島、前掲書、三八頁。その他大島氏の著書から学んだことは、世間で外性器から男だとか女だとか判断し、区別しているが、実際はそんな単純な事柄ではなく、遺伝子の性、脳の性、ホルモンの性、生殖器の性、胎内環境の性、養育環境の性などがあって、全ての人間は女と男の間でどちらかに偏位している存在であること。そして、性染色体異常やホルモン異常による性分化異常に半陰陽があり、また胎内環境や生後

の育ち方の因子から精神的アンドロギュノス（両性具有）となる場合もあり、そのような人たちを短絡的に変態呼ばわりしてはいけないということである。

(40) E・モルトマン＝ヴェンデル、J・モルトマン（内藤道雄訳）『女の語る神・男の語る神』（新教出版社、一九九四年）八一頁。

(41) 「律法を徹底させるもう一つの律法とはとらず、あらゆる人間に姦淫を犯す可能性があることを示唆することにより人間の限界を露呈するための言葉」と取る（荒井、前掲書、三六六頁）。

(42) 「あなたたちはイスラエルの人々を戒めて汚れを受けないようにし、あなたたちの中にあるわたしの住まいに彼らの汚れを持ち込んで、死を招かないようにしなさい。」（レビ一五・三一）。

(43) カントリマン、ホロウェイ編、前掲書、五六頁。R・リューサー（中田敬子他訳）『人間解放の神学』（新教出版社、一九七六年）一〇二―一〇四頁参照。

(44) 「生理期間中でないときに、何日も出血があるか、…その期間中は汚れており」（レビ一五・二五）。

［平成七年（一九九五年）十月三十日　受理］